

パ ス カ ル の 「賭」

小林 太市 郎

一、緒論、二、本文と注釋、三、批評、四、賭とバスカルの思想の矛盾、五、賭の先蹤

バスカルの姉、マダム・ペリエの「バスカルの生涯」に、

「そのころ、私の娘の涙癩瘰が神によつて平癒した。……この癩は非常に悪い性質のもので、巴里の最も上手な外科醫も到底癒らないと云つてゐたのである」

バスカルの妹ジャクリスは夙くからポオル・ロアイヤルに入つてゐたが、そのマダム・ペリエへの手

紙（一六五六年三月二十九日）に、

「二十四日火曜日に僧 De La Potherie 氏こちらへ甚だ美しき遺物匣送り來られしが、の中には銀鍍せる小さき太陽形の觀示臺ありて、またその中に聖冠の刺の破片を收めたり。返さるる先に僧院のものすべて、を拜し得む爲之を小さき祭壇に置き奉りき。……妹フラヴィ Flavie はその近くに候ひしがマルゴ Margot（即ちペリエの娘）の近づき來るを見て之をその眼に觸るゝやう教へ自ら聖匣を取りて何の氣もなく彼が眼にあてがひぬ。

その宵妹フラヴィは此事を忘れゐたるに、ふとマルゴの小さき友に云ふを聞けば、わが眼癩りぬ、痛み止みぬと云へり。驚き近づき見れば眼の隅にありし小さき腫物の朝は指先程の大きにて長く固

かりしが跡形もなし……………」

バスカルは神の「此恩恵に深く感激した」(マダムペリエ)すなはち Panses に、「神は如何なる家族にもまして我らを幸福にし給ひし故、また我らより深く感謝に充てる家族をつくり給はざらむ」(cf. Brunschvicg, fragment 556)

そして神への感謝をあらはすに無信仰者を信仰に入れる程ふさはしいことがあらうか。マダム・ペリエによれば、

「彼は此時無神論者の重な堅い議論を破らうと思ひ立ち、……………彼らを説服するあらゆる方法を求めた」

斯くして、バスカルは Apologie de Religion を計畫したのである。

しかし、ジャンセニズムでは人の信仰を有するに至ると否とは、たゞ神の恩恵(Grace)にかゝり人間の干渉し得ることでない。バスカルのアポロジイ

は彼がジャンセニストである限りそれ自身矛盾たるを免れない。彼自らも此矛盾を意識し、それを最少限度に止めやうとして「賭」Pari を案出したのであるが、之は却つて、後で示すやうに、彼をジュスイトに接近せしめる結果を産んでゐる。彼がポオル・ロアイヤルの友人に口述したアポロジイのプランに賭のこの見えないのは注釋者すべて不思議とすることであるが、それは賭の思想が甚だジュスイト流であるところから、バスカルが注意して、わざとジャンセニストである彼らに洩らさなかつたものらしい。とにかく「賭」はラシユリエを反省せしめた哲學的意義を有するとともに亦、バスカルの思想の興味ある動搖を顯し、更に彼とその時代の關係の一面をも明にする。以下先づ Panses の本文に依つて賭のデアレクチックを説明し、次に此らのことに論及しやうと思ふ。

二

賭に關する斷片は甚だ難解である。隨つて注釋も多いが皆一長一短を免れぬ。特リラシユリエの注 (No. 5 sur le Jari de Pascal, Revue philosophique, juin 1901)は稍完全に近い。今は主として之により、その不足を補ひ、曖昧な所は原文を擧げて解いて行くこととする。

[Ed. Brunschvicg, fragment 233.]

「無限——皆無——心は身體のうちに投せられ、そこで數と時と擴りを發見する」

身體 corps とは比喩的に云つたまで、實は經驗を可能ならしめる條件、その範疇の總體を指すものであらう。

「心は此うちに推理し、之を自然、必然と呼び、それ以外のものを信じ得ない……」斯くして

「人は有限の存在と性質を識る。何故ならば人も

亦有限で且延長を有するからである。人は無限の存在を知るがその性質を知らない。何故ならば無限は人と同じく延長を有するが、人のやうに限界を有しないからである」たとへば、

「人は數の有限でないことを知るから、數に無限のあることは眞である。しかし、人はそれが何であるかを知らない。それは偶數たり得ない。奇數たり得ない。それに單位を加へることはその性質を變へないのである。けれど、それは數である。そしてすべての數は偶數か奇數かである」

同じく、時に就ても空間に關しても、人は無限の存在を知るが、その性質を識り得ない。蓋し時、空、數は範疇として人間精神に内在する。故に、此らが如何に無限であつても、人はその存在を知る。隨つてまた、此らに即して無限の存在を知り得る。

「しかし、人は神の存在をも、その性質をも知ら

ない。何故ならば、神は延長と限界とを有しないからである。……たとへ、神があるとしても、神は無限に不可解である。神は部分と限界を有せずしたがつて人間と何等の類似も有しない。故に人は神が何であるかをも、神が存するか、存しないかをも知ることが出来ない」

しかし、故に人は神の存在を賭け得る。

「神はある。若くは、ない。……理性はいづれども決め得ない。……無限の距離の彼方に勝負が行はれてゐる。裏が出るか。表が出るか。どちらへ賭ける？」……「賭けないのが正しい」——
「しかし、賭けねばならぬ。これは隨意でない。人は必ず賭けるを要する。……表、即ち神があるとして、損と得とを較べやう」

言葉が足らず、わかり難いが次の意味である。

神は、若しあれば、人が自ら拒まぬ限り、後の世で人を無限に幸福にする。そして此幸福を自

ら拒まない爲には此世に於てすでに自己の享樂を捨てねばならぬ。神の存在と、永遠の幸福と自己をなくすることとは、バスカルに取つて相依つて立つのである。故に、神があると、ないとするのはたゞそれだけで濟むことでない。神をあるとするには、必ず事實に於てさうするらしくせねばならぬ。即ち、まづ自己を捨てるを要する。代りに、之はまた死後の永遠無限の幸福を伴ふ。此故に、神の存在を認め、否むのは賭になり得るのである。賭金として捨てるものは此世に於ける自己の享樂に外ならない。賭が當れば、人は永遠の幸福を得る。そして自己の享樂を捨てないことは、たゞちに自己に愛着すること、即ち神の非存在を賭けることであるから、人はいづれかを賭けねばならぬと云ひ得るのである。そして、此世に於ける自己の享樂を永遠無限の幸福に較べる時は、たゞ皆無が

無限に對すると同じであるから、此斷片の始めに、無限——皆無、——と標したのである。故に、神が存すると賭けて、

「若し當れば人はすべてを得る。當らないでも何物も失はない」

反對に、神が存しないと賭けて失敗すれば、地獄の苦を受けるであらうと、エ・アヅエは注してゐる (Pausan. ed. E. Havet 1886: Article X § 1) しかし、地獄のことは此斷片に見えない。ed. Br. H. 399 には見えるが賭と直接關係しないやうである。地獄までもなく無限の幸福を取損ね、皆無に陥つたので充分であらう。さて此皆無、即ち自己の享樂を賭金と認めるところ、パスカルは猶之に少しの價値を許してゐるが、それはたゞ計算の便宜からにすぎない。

「議論は立派である。然り、賭けねばならない。けれど、恐らく私の賭金は多すぎる」

即ち、不確かな死後の幸福の爲、確かな現在の自己の快樂を捨てることは餘り大きい犠牲でないか。決して然うでないことを之から明にするのである。すなはち、

「當ると當らないとの偶然率は等しいから、一つの生命を張つて二つの生命をしか獲られない時でも人は賭け得る、けれど、三つの生命を獲られる時には人は賭けねばならぬ。(何故なれば人は賭けるを要するから)。そして、賭けねばならず、また當ると當らないの偶然率の同じい時、三つの生命を獲る爲に自分の生命を張らないのは恐である」
こゝではたゞ生命の長さが問題である。二つと云ひ、三つと云ふのは人間普通の生命の長さだけが二倍三倍あるものを云ふ。「人は賭け得る」
「賭けねばならぬ」の「賭ける」は神が在ると賭けること。「賭けるを要する」の「賭ける」は、あるか、ないか、どちらかを賭けること。一つの生

命を張つて二つ獲る時にも利益は明かであるから賭けねばならぬと見える (Llavet, Op. cit. sec. cit.) が、當ると當らないの偶然は等しいから、ともに1とし得る。すると、神があることの當る偶然率はきとなる。したがつて、當れば獲られる二つの生命の價值は $2 \times \frac{1}{2} = 1$ 即ち一つの生命にしか當らない。一つの生命に對して一つの生命を賭けるのは損でないが得ともならない。人は「賭け得る」が、賭けなくても好い。然るに同じく、生命を一つ張つて、三つ獲られるならば、三つの生命に偶然率を乗じてても1は生命となり賭は一つの生命と一つ半の生命の交換となるから明かに利益である。故に、人は賭けねばならない。

《Mais il y a une éternité de vie et de bonheur. Et, cela étant, quand il y aurait une infinité de hasards dont un seul serait pour vous, vous auriez

encore raison de gager un pour avoir deux, et vous agiriez de mauvais sens, étant obligé à jouer, de refuser de jouer une vie contre trois à un jeu où d'une infinité de hasards il y en a un pour vous, s'il y avait une infinité de vie infinement heureuse à gagner.)

此所は殊にわからない。たゞ議論の進め方は前を受けて同じであり、賭の條件は變つてゐることが窺はれる。(文章の混雜は條件を異にする前の段と此段の賭を一緒に書いたことから生ずるらしい) 先づバスカルは假に神の存する偶然が無限数の偶然のうち唯一つにすぎず、したがつてその確らしさは最早までなく、¹ *infini* であるとする。賭金は前と變らず、人の現在の生命である當れば獲られるものは、たゞ長々の二倍三倍な生命でなく、始めに「生命と幸福の無限」であり、次に「無限に幸福な生命の無限」となつてゐ

る。さて、此新しい條件のもとにパスカルは、「神がある」と賭けることの損か得かを再び計算していくのである。計算は前と同じく二段にわかれる。始めの段では、當る確らしさは無限分の一であり、當れば獲られるものは「生命と幸福の無限」である。此無限と彼無限とは相殺するから、獲られるものは生命と幸福の二つとなる。一つの生命を張つて此二つを獲るのであるから、前の、生命を一つ捨て二つ獲る賭に相當し、賭け得るが利益とならない。之が *est égal à un pour avoir deux* までの意味である。

次に、同じく無限分の一の確らしさで「無限に幸福な生命の無限」を獲られる時には最初の無限は第二又は第三の無限と相殺するが猶一つの無限が残り、たゞ現在の生命を捨て、「幸福な生命の無限」か「無限に幸福な生命」を獲ることとなる。即ち、一つの生命を失つて、幸福と

生命と、そのいづれかの無限との三つを得ることとなり、前の、生命を一つ張つて三つ獲る賭に相當する。したがつて賭けねばならない。 *vous ne pouvez pas gagner* までは此ことを云ふらしい。ラシリエ自身も此解釋を無理としてゐるが原文が擧げた通りであるから、如何なる解釋も少しの無理は免れないであらう。猶、ポール・ロアイヤル版は此段を抜かしてゐる。

「しかし、こゝには無限に幸福な生命の無限が獲らるべくてあり、それを賭る一つの偶然に對して失ふ偶然は有限にすぎず、そして人の張るものも有限である。 *cela ôte tout parti.*」

ブルンシュヴィクは *est* と讀んでゐるが外の版には *est* とある。 *ôte* の方が宜さうである。

「こゝには」とは、實際にはの意、前の二つの賭はたゞ假設にすぎない。實際の條件では、神ありと賭けて當れば、生命と幸福とを無限の二

乗倍したものが獲られる。しかも、その反對の偶然と、賭金はいづれも有限にすぎない。

「無限があり、しかも、それを失ふ偶然が、それを獲る一つの偶然に對して、無限でない限り、考較の餘地は存しない。すべてを捨つべきである。

……」

まして、實際獲られるものは無限の二乗であり捨てるものは虚無に等しい現在の生命にすぎず更に當ると當らないとの偶然は同じでないか。

敢然、神ありと賭くべきである。しかし、

「私は信し得ない性質である。……」

では、さういふ性質でありながら、信仰を得た

ものゝ眞似をせよ。彼らが信仰に入つたのは、

たゞ

「聖水を取り、彌撒を行ひなど、すべて信仰するかのやうに行爲したからである。斯くすることは自然、人を信せしめ、人を愚鈍にするであらう。

vous abêtra.....」

斯く信ずるかのやうに行爲することによつて、

「人は、忠實、圓滿、心にまづしく、感謝に充ち慈悲あり、誠ある眞の友となる。かゝる人は汚濁の快樂と、高漫心と淫悦とを持たない。けれど外ものを持たないだらうか、私は云ふ。此世から人は利益を得る。そして、此道を進む一步／＼に人は得ることの確實と捨てる物の無價値とを確めて行き、遂に、何物も捨てずして、確な、無限のものに賭けた事を認めるに到るであらう、と」

二二

此賭は甚だ奇妙な感を與へる。どこかに無理がある。けれど識別し難い。ラシユリエは二つの難點を擧げ、自ら解答してゐる。

一、神の存在がたゞちに永遠の幸福と生命とを實にするのは何故であるか。更に、現在自己の享

樂を捨てないことが、どうしてすぐ神の否定となるのであるか。バ斯卡ルは此三つ、即ち神の存在、永遠の生命、自己を捨てることを相関連するものとしてゐるが、果してさうであらうか、神はあつても人の生命は此世限りであり得る。永遠の生命と幸福とは、今の自己の幸福と生命とのそのまゝの繼續とも想像し得る。

しかし、バスカルに取つて、神は單に「幾何學の眞理をつくり、元素の秩序を保つ神」(B: 45)でなく、「愛と慰めの神、信するものゝ心と魂を充たす神、——彼等の心の深奥と合致し、之を謙讓と、歡びと、信賴と愛とに満たす神」(idid.)である。更に人の幸福は神を離れてあるのでなく、實に神のうちへの溶失にあるにすぎない。「眞の歸依は此普遍的實在の前に消失するのである」(B: 440)そして、少しでも自己に執するならば溶失は不可能となる。故に永遠の幸福を得る爲には

自己を捨てねばならない。

二、前に注した B: 233 のうちに、

「斯く云ふのは無用である、即ち獲るのは不確かであるが失ふのは確かである。失ふことの確さと得ることの不確さを隔てる無限の距離は確に捨てる有限の快樂と不確な無限を等くする、と。斯ういふ事はない。」裏か表か、神はあるかないかの二つである。二つとも取れば必ず當るから、一つ取つて當る確らしさは $\frac{1}{2}$ である。 $\frac{1}{2}$ 確かな未來の無限の幸福の今の價値は $\frac{1}{2}$ 、即ち依然として無限であり、有限な自己の享樂より遙かに勝ると云ふのがバスカルの議論である。然るに、ラシュリエによれば神があるかないかわからないことから、たゞちにその在る確らしさと速斷することは出來ない。或この確らしさはそのあり得る機會とあり得ない機會の比較から計算し得るだけである。神の存する確らしさを計算するには、先づ、神の

あり得る機會幾つ、反對の機會幾つと定め得なければならぬ。然るに理智の範圍内で人の知り得るのは、たゞ神の概念がそれ自身矛盾しないこと、即ち論理上可能だと云ふことだけである。しかし單なる論理上の可能と實際存し得る可能との間には大なる距離がある。たゞ論理上可能と云ふことから、たゞちにそれが實際存し得る確らしさ幾つと決定することは出来ない。神が實際に存し得ることは「不確」である。そして「不確」と「確」とは全く異つたもので、幾ら當れば獲られるものが無限の無限倍であつても、依然當ること、随つて、獲ることの不確さは消滅しない。之に反して自己の享樂を捨てることは確である。こゝにパスカルの賭を破壊するものがある。

しかし、たゞ、人が自らの意識の行爲を反省する時、その最深處に、最早概念としてゝなく現實の活動として、或は神らしいものを認め得る。認識

を認識たらしめ、判断を判断たらしめるものは、「である」と断定する行爲である。そして「である」とは「である」ことが絶對に真であることを意味する。人の實際「である」と認識するものが多く誤謬であるのは、たゞ感覺の狹隘と濁濁によるにすぎない。であると断定し、認識を認識たらしめ、認識を認識する行爲そのものは常に眞理を産出する。そして、人は斯かる行爲、眞理の源泉を自己の認識活動の最奥處に於て體驗し得る。すべての感覺の消滅した時、始めて眞理の源泉は純粹にあらはれ得るであらう。

同じく、人の意志はつねに最善を意志するが人の性癖と習慣は之を枉げて往々最惡に向はしめるけれど之は人の意志がその源泉に於てつねに最善を意志することをなくしない。反省によつてあらゆる感覺と性癖と我自己につながるすべてのものを捨てる。時人は自らの最深處に、眞と善との源

泉である神に類するものを直観し得る。予の身體の滅し、自己の滅する時、此ものはついに束縛をはなれて自由に、純粹に、無限に、永遠に存しないだらうか。或は神に類する此ものは、返つて、感覺と習癖を推し動かす爲あるにすぎず、感覺の滅することは即ち此ものゝ死をあらはすのでなからうか。理性はいづれども決め得ない。あらゆる證明の力及ばない時は之を信せよ、信じ得ないものは賭けよ、と云ふのがラシュリエの解釋である。パスカルに取つて神は元より單なる論理的存在でない。彼が、たゞ「神はあるかないか」と云ふ時にも、パスカルは現實、具體的の神を指してゐるのである。しかし、こゝに彼の相手とする無神論者は勿論之を單なる概念と取り得る。さう取らさない爲にはラシュリエの解釋によつて勿卒に書かれた本文を補はねばならない。

しかし、斯ういふ迂路を取るまでもなく賭は有

パスカルの賭

效である。パスカルによれば自己の享樂即ち賭金は虚無にすぎない。之を捨てれば、何ものも捨てないで、單に論理上だけでも神の存在の希望を得る。之に執着すれば、何ものも得ないのみならず單に概念上にも神の存在の希望を失ふ。實際に於て何物も得ず、失はないのは兩方同じである。そして一方は不確かながらも神の存在の希望を得るが他方は之をすら得ない。故に神ありと賭すべきであり、賭は成立する。しかし、現在の自己の享樂に猶少しの價値を認めるならば此確かな快樂は不確かな無限の幸福にまさり賭は成立しない。此場合にはラシュリエの迂路を取る必要がある。無論パスカルに取つては、賭金は虚無であり、且、神は實際上にも可能なのである。

四

斯くして、賭はそれ自身に於ては成立するが、

之をバスカル、更にジャンセニズムの思想の根本に對照すると甚しい矛盾があらはれて來る。そして、賭の此矛盾は、アポロジイそのものゝ矛盾が謂はゞ凝結したものに外ならない。ジャンセニズムの理論では人間の意志と理性とは何等信仰をおこす力を持たない。随つてアポロジイは不可能である。バスカルは何故此不可能のことを企てたのであらうか。彼は單に理智の人 *esprit de géométrie* でない。その生涯を通じてバスカルの心は神に對する感謝の念に充ちてゐたのである。彼の死後その着物に何か縫ひ込んであるやうなので、ほごくと一枚の羊皮紙が出て來た。それには次のやうなことが二十行あまり記されてゐたのである。

「確信、確信、感情、歡び、平和、

世界と、すべての忘却、神を除いて、

歡び、歡び、歡び、歡びの涙、

「イエス・キリスト、イエス・キリスト」

神に對して歡びと感謝を抱き得ることはその最も大なる恩恵に外ならない。如何にして之に報ふべきか。アポロジイの計畫はこゝに於ておこる筈である。そして、感謝と歡びを一時に強め、計畫を決定的にしたものは即ち始めに、記した聖刺の奇蹟 *Miracle de la Sainte-Epine* に外ならない。しかし、ブルンシュヅイクのやうに此奇蹟がたゞちにアポロジイを産んだとする (*Brunschvicg, Op. cit. p. 256*) のは簡單にすぎる、たとへ聖刺の奇蹟がなくともバスカルは必ず之に代る奇蹟を發見したであらう。

しかし、また、バスカルは單なる情熱の人でない。その鋭利な理智は神を無限に不可解とする自らの思想がアポロジイと矛盾することを知るに充

分である。之を調和さすにはアポロジイから理性を除外せねばならぬ。すでに理性を使ひ得ないならば意志を動す外はない。しかし、意志が直接簡單に神の存在を意志し得るに到るのも亦た、神の恩恵によるにすぎない。人の人に對してし得るのは、たゞその利害を説いて意志を動かし、神の存するかの如く行爲せしめることだけである。こゝに賭があらはれて來る。勿論、利害を較べるのは理性であるが此位の讓歩は止むを得ない。またアポロジイは理性の力をしか認めない *libertins* に對するのであるから此讓歩は必要でもある。しかし信仰をおこすに幾ら少しの役目をでも理性に許すのはすでにジャンセニズムの破壊でないか。多い少いは程度の問題にすぎない。理性によつて神を證明するのも、理性によつて神のあるかの如く行爲する利益を説くのも、共に理性によつて信仰をおこさうとするに變りはない。更に、理性の役目

を「神があるかのやうに行爲せしむる」ことに局限した結果、單なる身體的行爲と眞の信仰との間隙を埋める必要を生じ、之が爲斯かる機械的行爲に信仰を生ずる力か、少くも神を強要して信仰を奪取する力を與へざるを得なくなる。然るにジャンセニズムでは信仰はたゞ神の不可解な恩恵にかゝるにすぎないから、アポロジイをジャンセニズムに調和ささうとして案出された賭自身の結果が返つて理論上正面からジャンセニズムを破壊するに到つてゐる、のみならず、更にまた實際上、その敵であるジュースイトの布教法に賭の此結論は全く符合するのである。

十七世紀に於けるジュースイトの布教の態度を一貫する主義は俗世間との妥協である。新物理学を迫害したのは例外にすぎず、これには、また、その理由がある。その最も重なのは久しいスコラスチクの努力によつてアリストテレス物理学と教會

のドグマは餘り密接に結びつけられ、今更此の組織を破らないで彼を捨てることは出来なかつたからである。然るに道德の方面には斯ういふ事情が存しない。妥協は自由である。神の啓示した超自然的道德に楯籠つて自らを狭うするよりは之を世俗の水平に降し信者を一人でも多くしやう。神を愛するに心からする感情の愛 *Amour affectif* は要らない。事實の愛 *Amour effectif* 即ち愛する如く行動するので足る。信仰のないものは信するかの如く行爲せよ、さすれば、無限に善良な神は自ら信仰を與へるであらうとジュスイトは説いたのである。そして、之はバスカル、ジュスイトの斯かる議論に對する反動として信仰をたゞ無條件に神の恩恵に歸したジャンセニストのバスカルが正しく賭によつて人にすゝめる所でないか。バスカルはジャンセニズムを捨てたのであらうか。更に、

信じない者を信する如く行爲さすには、さうする

この利益と、しないことの不利益とを悟らすより外にない。故にジュスイトの此議論は自ら一種の「賭」へ導くが、事實、バスカルより二十年前、すでに或ジュスイトは明かに賭、しかもバスカルのに甚だしく似た「賭」を説いてゐるのである。

五

此ジュスイトのことを述べる前に順序として今知られてゐる「賭」の先蹤を擧げていかうと思ふ。

先づ、アルノオブの *Adversus gentes, Liber II, 4* に、キリストはその約束の眞なことを證明しないしかし、未來のことに就いて相反する二つの意見が、ありいづれをも確かに證明し得ない時は、そのうち希望を與へるものを取り、與へないものを捨つべきである。若し、キリストの約束を信じたとして、それが虚であつても何ら損はない。若し、信じなかつて、眞であつたなら救ひにはづれるか

ら大損害であると云ふことが記されてゐる。賭の精神に似てはゐるが、パスカルはアルノオブなどを讀まなかつたであらう。之を始めて指摘したのは Bayle である。

次に、モンテエヌのアポロジイによつて名高いレエモン・スボンの *Théologie naturelle* 第六十八章に甚だ賭と似た所がある。彼は先づ、神があるかないと、其自身に於ていづれが善いかを較べ、あれば無限の本質と不可解の善 *une essence infinie, un bien incompréhensible* が存するが、なければ随つて此らも存しないから、神のあるのは善く、ないのは悪いと云ひ、次に、此二つを人の立場から見れば、「ある」方は信頼と、善と、慰めと、希望とを興へるが「ない」とすれば悪と困窮が生ずる。故に、人はその自然の規則に依つて *par notre régie de nature*、それ自身に於ても善く、且、人に取つて利益のある神の存在を信すべきであると結

んでゐる。少し見ると甚だ賭に似てゐるやうであるが、實は賭より寧ろブラグマチズムの理論に近い。即ち、スボンは神を賭けやうとするのでなく、神のある方が、實際、人間に取つて利益だから、あるとせやうと云ふのである。だからスボンに説服されたものは、その方が有益だから、神があると簡單に信ずる。パスカルの賭を賭けたものはたださう信ずるやうに行爲するにすぎない。パスカルはモンテエヌを通じてスボンに興味を覚え、確にその書を讀んだらしく、スツロウスキによれば *Pensées* の思想と文章は往々 *Théologie naturelle* のそれに酷似する。(Pascal et son temps. III. P. 238-239) 賭は酷似と云ふ程でないが、スボンの考へに縁はある。或は之から思ひついたのかも知れない。

次に、Silhon の *De l'Immortalité de l'Âme*, Paris, MDCXXXIV, Livre I, discours II, P. 184

—189. に賭に似たことがあると指摘したものが、
 se^o (J. Calvet, Notes sur les pensées de Pascal,
 Bulletin de littérature ecclésiastique, Juin 1905, P.
 177, cité par Blanchet, L'Attitude religieuse des je-
 suites et les sources du pari de Pascal, Revue de
 Méaphysique et de Morale, sept., 1919, P. 622.)
 ブランシエの引く本文に依れば、シロンは此書に
 於て先づ物理的證明 Démonstration physique を、
 道徳的證明 Démonstration morale を區別し、前
 者は不變の因果關係を基礎として絶對確實である
 が、後者は然らず、一つの意見の眞僞を定めるの
 に之に隨伴する種々の事實と條件とを調べ、此ら
 が有益で眞らしくあつたなら、それを眞とし、反
 對であれば僞とするものであるとしてゐる。此道
 徳的證明と云ふのが賭の論法に少し似てゐるが、
 しかも賭自身とは全く異つたもので、シロン自ら
 は類似による證明 Démonstration par analogie を

も呼んでゐる。之を「賭」の先驅とするのは少し附
 會にすぎぬ。

最後 (J. シュヌイ、Anotoine Sirmond の Démonstration de l'Immortalité de l'Âme, Tirée des Principes de la Nature, Fortifiée de ceux de l'Aristotele etc., Paris, MDCXXXVII. 賭の、) は四五
 六頁から四六二頁にわたり、全體の結論として記
 されてゐる。之を始めて指摘したのはブランシエで
 數年前のことである。(Blanchet, Art. Cit.) シルモン
 は先づ神があるかないか理論上「疑問であつて、
 二つながら疑はしい」とする。しかし實際上、人は
 神の存するやうに行爲すべきである。その理由は
 若し神があれば神は此世で敬虔に生活したものを
 未來で幸福にする。故に、「常識ある人間は必ず幸
 福の永遠を失ふよりは寧ろ一日一時の快樂を捨て
 る」之に反して放逸の人間は「現在を享樂するを
 愛し、未來に望みをかけない」しかし、若し未來

があれば斯かる人間は「その重さの堪へ難く、その長さの無限である苦腦を受け、あらゆる善に充たされた幸福な状態の永遠に保證されたものを失ふであらう」しかし、「實際、現在の確實は未來の不確實にまさる。但し、此二つの間に幾らか釣合があればである。ことが永遠の生命か死かに關する時、一瞬の生命と死に執するものがあらうか」故に、不確ながらも、彼を得る爲に此を捨てることは當然であると結んでゐる。此書に信仰のことは記してゐないが、同じシルモンの *Deffence de la Vertu*, Paris, 1641. には神のある如く行爲することから人は自ら信仰を得るに到ると説いてゐる。(Blanchet, Art. Cit. P. 511)シルモンの此らの説に數學的嚴密を與へればバスカルの賭になりさうである

第十プロヴァンシアルの終り一方、神の愛を論ずる所で、バスカルはシルモンの *Deffence de la Vertu*. を引いて駁して居から、彼は此書を読んだとも思へる。しかし、此書が出るとすぐアルノオはその抜萃をつくつて攻撃してゐるから (*Extraits de quelques erreurs et impiétés contenues dans un livre intitulé: la Deffence de la Vertu*.) 或は之に依つたのかも知れない。 *Démonstration de l'Inimortalité* の方を讀んだか讀まないかはわからぬ。しかし、いづれにしても、その敵手であるシルモンの説をかなり深く知つてゐた筈である。随つてその「賭」をシルモンの賭から思ひついたことも甚だ確からしい。

また、第十プロヴァンシアルの出たのは一六五六年八月二日であるが、翌九月二十八日、Cartheyがハイゲンに宛てた手紙の中に、プロバビリテの問題に關するバスカルの新しい意見を彼がバスカルの口づから聞いたものを載せてゐる (Pascal, *Œuvres*, éd. Brunschwig: V. P. 415—417, 419—421) または、此年には、バスカルはシルモンの説を調べてゐる

とにも、プロバビリテの問題に就いて、未だ興味を失つてゐないのである。更にまた、同じ年の三月二十四日には聖刺の奇蹟があり、以來バスカルはアポロジイの計畫を進めてゐた筈である。此らの事情から推するとバスカルが賭を思ひついたのも亦此年、一六五六年の春から夏にかけてのことであらう。(Blanchet, *Art. Cit. scpt.*, p. 639)

以上四つ、——アルノオブ、スボン、シロン、シルモンの賭は、バスカルの「賭」の半面には似てゐるが他の半面、即ち數學的精神を缺く。バスカルの賭の特色は神の存在とその利害その問題を確らしさの計算によつて數學的に解決しやうとしたことにある。そして此はジュスイトの思想でもなく、ジャンセニズムの理論でもない。バスカルの獨創である。

(終)